

場 所：F102講義室

平成30年度「研究実践特論」
＝研究職を目指される皆さんへ＝

| 月 日 | タイトル 講師 | 概 要 |
|---------------|---|--|
| 10月11日 3時限 | 「生体分子を精密につくる」 梶原康宏 教授（化学専攻） | 学生時代から、天然に存在する有機化合物、特に、糖鎖、ペプチド、タンパク質を化学合成してきました。これら複雑な構造の有機化合物は、生体内では微量な量にも拘らず機能していますが、分子のどの骨格が機能を発現しているのか理解することはなかなか困難です。私の研究室では、生体から少量しか得られない分子を精密につくり、そして、その構造を微妙に変化させることで、どの骨格が機能を発現しているか調べることをおこなっています。そしてその理屈を理解することで新しい素材、薬などの開発を目指しています。本講義では、これらの研究分野で、世界の科学者がどのように考え、なにを目指しているかも含め最先端の研究者とはなにかを皆さんと討論したいと思います。 |
| 10月18日 3時限 | 「研究者は幸せ者の代名詞？」 田島節子 教授（物理学専攻） | 私が関わったいくつかのアンケート調査から、研究者という職業が他と比べて非常に満足度の高いものであることがわかっています。好きなことを仕事にできれば、これほど幸せなことにはないに違いありません。しかし多くの若者は、自分が研究者になれるかどうかを疑っており、私自身も疑うどころか「絶対に無理だ」と思っていました。一体何が起きて、今研究者の端くれをやっているのか・・・。「人生万事塞翁が馬」をまさに体験してきた経歴を紹介し、学生の皆さんが今後人生の岐路に立ったとき、何を基準に決断するかということについて、少しでも参考になればと思います。 |
| 10月25日 3時限 | 「大学教授は、現実的で、 やりがいのある職業の選択肢です」 松野健治 教授（生物科学専攻） | もし学生の皆さんが「研究が楽しい」と感じたなら、職業の選択肢として大学教授を真剣に考慮すべきです。少なくとも生物学分野では、研究が楽しいこと以外の条件はありません。経験的には、知能指数や頭の良し悪しは、大きな要素ではないように思えます。私や、私の友人たちのキャリアパスでは、起こりそうな経済的危機も取り越し苦労でした。多少の競争（たぶん、どんな職業にもついてまわる）と義務以外は、日常生活や、精神活動は、極めて自由です。私や友人の経験を題材として、研究者のキャリアにしたがって研究生活がどのように展開するかをお話しさせていただきます。 |
| 11月8日 3時限 | 「研究者として Global Standard を どのようにして身につけるか」 長峯健太郎 教授（宇宙地球科学専攻） | 混沌とする世界情勢の中で、自分らしい生き方を見つけるのが難しい時代になってきました。日本がこれから様々な局面で生き残りをかけていかねばならない中で、若い皆さんはどのように現代を生きていったらいいのでしょうか。企業で働くにせよ、研究者になるにせよ、「自分には global standard が身についているだろうか？」という点が一つの基準になるかもしれません。私自身は大学院生から教員・研究者になるまで、17年間海外で研究生活を送りましたが、そこから学んだことをお伝えしたいと思います。 |
| 11月15日 3時限 | 「数学の研究者になるということ」 大鹿健一 教授（数学専攻） | 数学研究を職業にしようとする、現状日本では大学か高専に勤めるというのがほぼ唯一の方法でしょう。現在そのような職種は大変狭き門であり、プロの研究者になるために何か処方箋があるわけでもありません。一方数学は国際的な学問であり、実験器具もいらないうえに、研究自体は国境を越えて行えるというメリットがあります。数学研究に必要なのは一つことに集中すると同時に、同じ興味を共有する人とのネットワークを作っていくことです。これらの点についてお話しできたらと思います。 |
| 11月22日 3時限 | 「日本学術振興会・特別研究員制度について」 大屋知子 特任准教授（大阪大学経営企画オフィス）、 坂口愛沙 助教（大阪大学大学院理学研究科） | 日本学術振興会の特別研究員制度というのをご存知ですか？M2以上が申請でき、採択されるとドクターコースに在籍しながら（あるいはポストドクターとして）月額約20万円の研究奨励金が支給されます。できるだけ多くの大学院生の皆さんに、この特別研究員に採択されるように、この制度と申請書の書き方について説明します。 |
| 11月29日 3時限 | 「研究が楽しすぎて・・・」 青島貞人 教授（高分子科学専攻） | 大学時代は体育会のクラブに専念し、4年で卒業して新聞記者になることが夢だった私が、なぜ大学に残ることになったのか。現在は、高分子科学専攻の高分子合成化学研究室で教授をしていますが、スタートは単に研究が楽しかったただけでした。若いだけで何者でもなかった私が、どのような過程をたどって現在のような状況になったのか、一つの例として聞いて下さい。 |